

第十三回『天×誅 THE MOVIE』今宵、お前にXを〜と
「よりぬきウマシカさん」

考え



ひとりぼっちの
反抗期

弦楽器イルカ⇒友人

第十三回 『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』と「よりぬきウマシカさん」 ～G から U へ～

大気が澄んでいて、空がすごい近くに感じられて、薄紫の鮮やかな夕暮れに向かって染まり行く車を走らせながら、感情が全く動かなかった。呆然と見送った後にその美しさを惜しむのだろう、あまりにも疲れ果てた一日だった。

過度の緊張から脱力した疲労が吐き気へと変化するのに合わせて、辺りが徐々に暗くなっていく。放心状態のなか、ふと、大して思い入れのないブルーハーツを、自然に、歌うってより絞りカスみたいな声でつぶやいてた。まるで許しを乞うような、流行から遠く誰にも届かないつぶやきだった。

ここは天国じゃない……
かと言って地獄でも……
いい奴ばかりじゃないけど
悪い奴ばかりでも……

弱い者達が夕暮れ
さらに弱い者を……
その音が響きわたれば……
ブルースは……

見えない自由がほしくて
見えない銃を撃ちまくる
本当の声を

上空、こっちに向かって黒い鳥が近づいてきて、よく見ると小さな影を追いかけてた。

たぶんカラスだと思うけど、スズメが何かを追いかけてて、つまり飛びながら捕食するつもりだと気づいた。俺は昔、カラスが生きてる鳩をついばんでたのを思い出した瞬間、小さい鳥に自分を重ねて「逃げろ」って呼びかけた。そしたらその後方から1匹、更にもう1匹のスズメがカラスに向かって飛び出し、3匹の小さな影は絡み合うようにカラスを翻弄し出した。

俺はただ呆気にとられて見てた。でもカラスだって生きるためには食わなきゃいけないって思いついた頃には、夕焼けを背にして行われた生き死にの影絵は遥か後方へ過ぎ去って見えなくなり、脇のコンビニに車を停めて空を確かめても、当たり前だけど、青暗い折り紙の向こうから白い爪を突き立てたみたいに、くっきりとした半月しかなかった。

だからバカみたいに、周りから明らかに変なヤツって思われるくらい長い時間、その月を見上げるハメになったって言い訳をここで書いてみた。

さて、ここまでの書き出しに「どうしようもないムーン」と名付けてみたところで、これまでの12回分を振り返る意味で、「よりぬきウマシカさん」を一回やってみよう。

「よりぬきウマシカさん」

「こんな原発反対運動はイヤだ！」

- ①原発推進を本気で止めたかったら、原発反対派だけでなく、原発推進派も納得するテーマを掲げて広く国民を巻き込む必要がある。
- ②今日も原発が爆発することなくギリギリの小康状態を保てているのは、数千人の作業員が働いているおかげだ。誰かが作業員にならなければ、この国は確実に自滅する。
- ③原発作業員のピンハネと低賃金、劣悪な労働環境、ずさんな管理体制等については、原発反対派も推進派も改善を求めており、作業員の労働には国民全体が感謝している。「作業員は奴隷として働け」と言う国民はいない。
- ④だから、御国のために身も心も削ってる全作業員の賃金を上げる運動は、賛成派も反対派も納得しやすい。そこでできれば月収一千万円、最低でも月収百万円をテーマに掲げる。
- ④全作業員の賃金を劇的に改善すれば、原発のコストは上がり、自然と原発推進できなくなる。

「こんな風評被害はイヤだ！」

原発の周辺住民はみんなその土地が大好きで、誰もそこから離れたくないし、子孫の代までそこにとどまりたいと考えていて、原発から遠く離れた人たちが絆でじっと見守ってくれるのが最高に嬉しいし、そこで取れた野菜はちゃんと線量を測った後であれば絶対安全なので、微塵も不安がらずに疑うことなく食べて応援しなければならない。

絶対に爆発しないはずの原発はあっさり爆発したし、例えば2014年02月25日、「1歳女児のがんにかかる確率が1.06ポイント上がった」との推計結果が出たけど、京大教授は「被ばくで確率はわずかに増えたが、健康への影響は小さい」と話しており、たとえわが子が大量に鼻血を出しても甲状腺ガンになったとしても国とは全く関係がない個人的な事件なので絶対安心だから、国がそういった家族の心を支えるために希望者には移住も視野に入れたケアを施す必要は一切なく、わずかの悩みも許されないし、報道してもいけない。これに反する愚か者は再教育か国外追放の必要がある。

以上が国民全員の総意である、という風評被害。

「こんな『イニシエーション・ラブ』はイヤだ！」

昔、Uが薦めてくれたあの本が再ブレイクらしいけど、世間の評価は概ね、

「肯定派：普通の恋愛小説と思ったら、最後の衝撃が忘れられない！」か、

「否定派：ラストは驚くが、全体の内容がつまらない」のどっちかだ。

でももし俺がこの小説を仕方なく書き直すとしたら、後半全部変えて、前半の恋愛の続きをガラガラ普通を書くね。

「G：前半は素直で面白かったのに、後半はネタを置きにいくだけの展開でラストの衝撃はあるけ

ど読む必要はあんまなかった」って感想をみんな普通に抱くと思ってたのにな。また逆か、世間。逆マーケティングか。

「こんな春樹の新作はイヤだ！」

巷では村上春樹の新しい短編集が出版されて話題みたいだけど、春樹が今日本にいる意味を俺が勝手に超解釈すると、『アンダーグラウンド』形式のインタビューを原発作業員に対して行うためだと思う。

最近、爆発した原発の廃炉作業に関して、「誰が作業を担うのか」ってNHKのドキュメンタリーがあった。原発作業員が待遇や社会的地位等、ほぼ全ての面で著しく尊厳を踏みにじられ、かつ国民や文化が一貫して改善を訴えない現実を前にして、この国の作家が他にいったいどんな物語を描くというのか。（職業に貴賤なしと言いながら、警察や医者や教師はしつこいくらいドラマ化されても、原発作業員はほとんど語られていない）

誠実な作家であれば、「自分を有利に活かすために他人を踏みにじるのは当然」という現実の延長線上でしか現在を物語れない。だがそんな物語をいったい誰が欲する？

というワケで、667人の天下りが着々と成功しているそうだし「トイレの神様」の次はきっと、「下りの神様」が流行ると俺は思うね。「アマクダリオオミカミ」が貧乏神たちを作業員にして裕福に暮らす物語なんて、俺も含めてみんな大好きそう。だよな？ DAYONE？ 春樹に是非書いてほしいYO・NE！

以前と同じ正義や夢を恥ずかしげもなく語り、無自覚に受け入れるのか？「悪を実行する自分こそが正義である」という現実を受け入れ、他人を踏みにじる物語を肯定するのか。

『アンダーグラウンド』で、「サリン事件を通して物語の意味が問われている」と書いてた春樹だ。震災以降、この国に突きつけられている物語の命題を見逃すワケがない。

というワケで今回は話題の短編集にはまったく触れることなく、逆に世間でピクリとも話題にならず、かつ俺のなかでも既にだいぶ情熱が冷めてきてるにも関わらず、「こんな『天×誅 THE MOVIE ~今宵、お前にXを~』はイヤだ！」を仕方なくやりたい。思いついちゃったからには書かないと座りが悪いので。誰に望まれたワケでもなく。

『天×誅 THE MOVIE ~今宵、お前にXを~』

前回の予告編：

『天罰~闇の仕分け人~』というドラマが第8話で打ち切りになった。表向きは視聴率の低迷だったが、全体的に視聴率の取れない今クールのドラマの中で、なぜ『天罰』だけが打ち切りになったのか？

『天罰』の主演女優から調査を依頼された『天誅』の面々が探り当てた驚愕の真実とは？ 政府、電力会社、高級官僚、飼い慣らされたマスコミを『天罰』するはずだった幻の最終話シナリオが存在した？ 権力に媚びる上層部の圧力に屈したのか？ 真に天誅されるべき黒幕Xの正体とは？

女忍者、古武術、ピッキング、声色、そしてピン子。「天誅組」の明日はどっちだ！

本編あらすじ：

ピン子、いつもの居間で、いつもの3匹のおばちゃん、せんべいを齧りながらテレビドラマを観ている。

ピン子「いいねこのドラマ、サイコーにいい。何でこの『天罰』ってドラマ、8回で終わっちゃうんだろ。特にこの、主演の娘を助けるおばちゃん、サイコー。いや、おばあちゃんじゃなくて、あくまで、おばちゃんね。なんでかしら、すごく共感できる。ピンポイントでシンクロしちゃう。水泳しちゃう。この際ハイレグはいちゃう。いけるかしらアタシ」

鷺尾さん「いけるわよー。三途の川のマーメイドとはまさにあんたのことよ」

もう一人のおばちゃん「絶対モデル料取れるわよ。♪嫁にきびしい～、マーメイド、って」

ピン子「♪金に汚い～、マーメイド～、ってか。余計なお世話だっけの」

そのどうでもいい会話を横でちょこんと正座して黒猫のごとく聞いているサナ。

テレビ「それではここで天気予報です。今週末は、局地的に大荒れとなる模様です」

(中略)

そこからピン子と愉快的仲間たちがウカウカといろいろしてるうちに、慎吾ちゃんに『天罰』の主演女優から「ヘルプ天使」にメールが届く。

メール「『天罰』打ち切りの裏に、闇の力が働いたのではないかと私は思うのです」

ミツ子「このメール。闇の仕分け人が闇に葬られるって、まさに闇から闇へって感じね」

慎吾ちゃん「ミツ子の交際関係もおんなじくらい真っ暗じゃない？」

ミツ子「失礼ね。アタシの男関係は常にバラ色よ！」

慎吾ちゃん「バラはバラでもバラバラの離散状態だったりして」

ピン子「ハチ、ミツ子。くだらない。本当に毎回くだらないよ、あんたたちの会話。でも、くだらないもの、いいじゃない。アタシは大好き。くだらないドラマにも、いいモノはある。そのメールの件、調べてみよう。サナ。頼んだよ」

サナ「承知」

(中略)

主演女優にサナが会いに行き、事情を聞く。

地味な主演女優「本当は、おじいさんのストーカーを追いかける回とかあったのですが、気づいたら途中打ち切りになってしまって」

サナ「なぜ？」

地味な主演女優「噂では、最終回に別のシナリオがあって、それが上層部の気に入らなかったという話が。でも本当のことはわかりません。プロデューサーを探れば何か出てくるかも」

サナ「わかった」

(中略)

プロデューサーの部屋を探ろうと、テレビ局へ正面突破しようとする5人。テレビといえば奇抜な衣装ということで、無茶なコスプレをする5人。例：ピン子=かぐや姫。ミツ子=スパイ風全身黒タイツ。慎吾ちゃん=救急隊員。京本=カブキ者。サナ=忍者。もちろん、警備員に止め

られる。

警備員「すみません、パスがないと入れない規則なので」

ピン子「え？ あなた、あたしを誰だと思ってんの？」

警備員「その、誰って言われても」

ピン子「あたしは天下の大女優だよ！ 普通、顔パスでしょうが！」

警備員「いや、そう言われましても」

ピン子「え？ この業界を何十年も突っ走ってきた面子が5人も揃ってなのに、ねえ、あたしら顔が履歴書みたいなモンでしょ？ だからホラ、あんたたちも履歴書、見せてやんなさいよ」

ミツ子「ブタゴリラー、キテレツー、コロスケー、今行くからねー！」

慎吾ちゃん「ウーウー、道を空けてくだサーイ、緊急車両、通過しマース！」

京本、カッコいい決めポーズで威嚇。

サナ、京本を真似してクナイを逆手に構える感じながら、微妙にオドオド。

警備員が勢いに気おされて、5人がわちゃわちゃとテレビ局に入っていく。

サナだけ振り向いて警備員に一礼し、堂々とした4人の後について行く。

慎吾ちゃん「いや、さすが持ってるね、まあちゃんは」

ピン子「なあに、この業界、ハツタリでなんぼのそこあるからね。あの守衛さん、きっとあたしのこと往年の大女優と思っただろうね」

ミツ子「そうね。絶対思ったはずよ」

ピン子「だよ。絶対吉永小百合と勘違いした……」

慎吾ちゃん「それはない」（食い気味で）

ミツ子「ないわ」

京本「ない」

ピン子「え、そんなことないよ。そうだよ、サナ」

サナ「よくわからない。でも、それだけは断じてない」

ピン子「ああそうですか。どうせアタシは大根メシー一本でのし上がった、キッタネエババアだよ」

慎吾ちゃん「そこまでは言ってないって」フォローする面々。

（中略）

その後、他バラエティー番組等へのスタジオ乱入。番宣兼ねてのコラボ出演あり。

司会「あれ、ピン子さん、なんでいきなり？」

ピン子「違うよ。あたし、吉永小百合だよ」

司会「それはない」

この手のやり取りを何番組か繰り返す。

ピン子「あれ、サナはどこ行った？」

（中略）

藪の中に迷い込んだサナ。声が聞こえる方へ歩く。

侍「この小娘、何ゆえワシの命を狙った。生かしてはおけん！」

侍が、ぼろを着た娘を切ろうとする。娘の顔がゆう（＝ゆかり）に見える。

サナがさっと両者の間に入り、侍の刀をクナイで受ける。

侍「え？ …お、おのれ、忍め、成敗してくれる！」

刀を振り上げた侍を蹴り倒し、娘を連れて逃げようとするサナ。侍がぶつかった弾みでセットがバタバタと倒れる。

監督「カット！」

娘「ちょっと何、どうしたの？ あんた誰？」

サナ、娘をまじかに見ると、全くの別人であることに気づく。

サナ「す、すまぬ」

無駄にバクテンとかしながらスタジオから抜け出すサナ。

監督「え、あんなコの出番あった？ ていうか、あのコ主演に使おうよ？ あれ？」

（中略）

テレビ局、警察とイケメンと怖い顔、政府等、いろいろ調べていくうちに、幻のシナリオがあったことは判明する。しかし、打ち切りが決定するより先にそのシナリオはお蔵入りしていた。打ち切りは単に予算の都合上であり、シナリオの不採用は視聴率や世間の評判、ネットの炎上を気にする現場の空気が自主的に判断しただけだった。

スナック「天守閣」に集う5人。

ミツ子「つまり、事件じゃなかったってこと？」

慎吾ちゃん「なんだよ。こんだけ調べて、結局くたびれもうけかよ」

ピン子「でも、もし、ちゃんと、世間の批判を怖れることなく、あのシナリオが予定通りにドラマ化されていたら、打ち切りはなかったかもしれない」

ピン子に視線が集まる。

ピン子「何か違うんだよ。この事件は、事件じゃない。もっと大きな事件が、既に起こっている。アタシたち、みんなの後ろで」

ミツ子「どういうこと？」

ピン子「事件にならなかった事件が、この世には本当にたくさんある。自主的にその場を取り繕うことで、取り扱われず、忘れ去られ、思い出されなくなった事件が山ほどある。ゆかりもそうだよ。何度も諦めろって言われたけど、アタシは諦めなかった。どんなに波風を立てても、他人から批判されても、まだ探し続けてる。事件が忘れ去られてしまったら、ゆかりも初めからいなかったことにされちゃうから。それだけは、絶対に許せない」

慎吾ちゃん「まあちゃん」

ピン子「事件はもう、とっくの昔から起こってたのかもしれない。サナ、あんたが来たときから、アタシは、気づいてたのかもしれない」

京本「それは、いったい何を？」

ピン子「先生。この国には、まだまだ語られていないことがたくさんあると思わないかい？ いいとか、悪いとかじゃない。反対や賛成じゃない。ただ、どうしてこれがそこにあるのか。どんな理由で、なぜそこにいるのか。そして、これから先、いったいどうしていききたいのか。議論の始

まりは、まず、知ることだよ。何も知らなければ、話し合いにもならない。ただ偏見と無関心が右と左にこの国の空気をかき回すだけ。

あやふやに出来上がった空気の上にアタシたちの島国が漂ってるだけじゃ、なんだか虚しいじゃない。アタシは、サナが、その空気を……………」

そのとき、「天守閣」の窓が破られる。

ピン子「何者だい！」

突風が吹き荒れ、店内のボトルやグラスに限らず、すべてをめちゃくちゃにする。

京本「なんだこれは！」

ピン子「空気だよ。これが空気の正体だ。窓の外を見てご覧！」

窓の外を見ると、大きな黒い雲のような塊が上空に浮かんでいる。

ピン子「私利私欲の塊。無関心の塊。バッシングの塊。事なかれ主義の塊。国民の総意の塊。あれがこの国の正義なら、ぶっ壊して一からやり直したほうがいいんじゃないのかい。サナ」ピン子の眼がギランと光る。

「天誅！」

「承知」

そして握り飯。

サナ、握り飯を頬張りながら、ビルの壁を蹴って上空へと駆け上がって行く。

ピン子「もし、サナがこの時代に来た意味があるとするなら、あの大きな私利私欲の塊が、サナを呼び寄せたんだよ。この国の人間一人ひとりが抱えてる闇を、サナは、天誅しに来たんだ！」

東京タワーのてっぺんから黒い塊に向かって飛ぶサナ。眼前に蠢く闇からたくさんの恨みがましい声が聞こえる。

サナ「天誅」

目をつむり、その闇に大きな赤いバツを刻むサナ。全国民の前にサナが現れ、額にXの字を刻み、そして消える。

と同時に、裂け目から強烈な光と風が出現しサナを吹き飛ばそうとする。そのまばゆい光の中からユウが必死に手を伸ばしている姿が見えた気がして、サナも手を伸ばす。

指が届いたように見えた次の瞬間、バツが全ての闇を呑み込み、何事もなかったように辺りが静まり返る。

ミツ子「…なんだったの、あれは」

慎吾ちゃん「おい、サナ、消えちゃったよ」

ピン子「サナ！」

ピン子の声が、辺りに響き渡る。

テレビ中継「大変です。先ほど、目の前に女性の幻影が見え、何かの武器で2度、攻撃されました。私だけではありません！……………」

(中略)

数日後、サナを除く4人が、スナック「天守閣」で、天誅組の解散パーティをしている。

ピン子「楽しかったね、ホントに。ありがとね。みんな」

慎吾ちゃん「こちらこそ。ホント、いい夢見せてもらったよ」

ミツ子「でもアバヨはいわないで。このお店の面倒は一生見てもらうつもりだから」

ピン子「当たり前だよ。みんなそのつもりだよ。…サナはいなくなっちゃったけど、アタシたちはずっと仲間だよ。あのコもきっと、元のあっちでうまくやってるよ」

しんとする4人。そのとき、京本が胸から写真を取り出す。

京本「ゴホン。ちょっといいですか。実はね、みなさんが揃ったときに、お見せしたい写真があります」

ピン子「なんの写真だい、先生」

ミツ子「あら、先生のブロマイド？ 買うわ、おいくら？」

京本「いやいや。私、実はかなり前から、お墓に興味を持っておりまして」

慎吾ちゃん「墓に興味って、そんな、墓石のセールスでもするつもりかよ？」

京本「まあ、あるきっかけで割と頻繁にお墓参りをするうちにね、墓そのものに興味を持ち始めて、江戸時代とか、戦国時代とかの古いお墓を巡るのが趣味になりまして」

ピン子「なに、もったいぶらないで早く要点を言ってよ」

京本「それで先日、用があって三重県西部の伊賀市を訪れまして、ついでにいろいろと墓を巡って見たのです」

ピン子「…三重県、伊賀市？」

京本「その昔、伊州、と呼ばれていた所です」

ピン子「伊州、…ってまさか、サナの！」

ミツ子「え、なに、まさかってなんのまさか？」

慎吾ちゃん「まさかのまさかりかついじゃう？ それともくさかりたみっちゃう？」

ピン子「うるさいよ、バカ二人！」

ミツ子「なによ、あたしは別に何も」

ピン子「先生、それで？」

京本「ええ。そのまさかです。随分探しましたが、あったんです」

慎吾ちゃん「え、置いてかないで、先生はいったいどこで何をかついだのよ？」

京本「サナちゃんのお墓が。その昔、伊州と呼ばれていた、忍者の里に」

3人「えー！」

京本「それがこの、写真です」

のぞき込む3人。

ピン子「本当に、これ本当にサナの墓なのかい、先生。どうしてわかる？」

京本「たぶん、間違いないでしょう。まあ、古い墓には本来いろいろ特徴があるのですが、そこらへのウンチクは省くとして。読みづらいますが、まず名前を見てください」

ミツ子「なにになに。…セン、って書いてあるように見えるけど」

ピン子「…サナの本名だ」

ミツ子「え、ホント！」

京本「そしてこの横の所。読みづらいますが」

慎吾ちゃん「あ、なんか書いてある。えと、握り、飯……」

サナの声「握り飯、ありがとう。美味しかった。サナ」

ピン子「…サナって、書いてある」

京本「この墓はとても立派でした、きちんと残っていて。詳しい人を探して聞いたのですが、なんでもその土地に伝わる話ではその昔、稲作で財を築いた有力者であつたらしい、と」

ピン子「あの、サナがかい？」

京本「でも、それだけじゃないんです。もう一つ、その隣に寄り添うように、これも立派なお墓がありました」

ピン子「え？」

京本「これです」

京本、もう一枚の写真を出す。

ピン子「ユウ。……おかあさん」

ユウ＝ゆかりの声「おかあさん。サナを助けてくれて、ありがとう。ゆかり」

ピン子「ゆ、かり……」

写真を抱えて泣き崩れるピン子。

慎吾ちゃん「つまり、まあちゃんの娘さんと、サナは」

ミツ子「生き延びて、頑張っ、あの時代で、二人で」

ピン子「…さびしく、なかったんだね。ゆかりは、サナと二人で、立派に生きたんだね。よかった、よかったよ」

泣きながら、うなづくピン子。抱きとめるミツ子と慎吾ちゃん。

京本「……大丈夫でしたか？」

ピン子「ありがとう先生。うん。あたしね、夢が出来たよ」

京本「それはどんな」

ピン子「昔へ行って、サナとゆかりに会うよ」

慎吾ちゃん「え、どうやって？」

ピン子「そこらへんでどこでもドア見つけてさ、鍵開けてきてよ」

慎吾ちゃん「無理だよ、何言ってんだよ」

ピン子「あんたに開けらんないドアはないんだろ？」

慎吾ちゃん「そうじゃなくて、どこでもドアなんてないよ、どこにもないドアだよ」

ピン子「じゃ、あれだ、ミツ子、キテくん頼んで、あの発明品、あれ借りてきてよ」

ミツ子「キテレツー、航時機貸してー、すぐ返すからー。って無理よ！」

ピン子「なんだよあんたら、役立たずだね」

そのとき突風が吹く。

ピン子「え、ここ、どこだい？」

いきなりどこでもない野原の真ん中に、4人は立っている。

サナ、気づいて振り返る。

ユウ「ん、どうしたの、お姉ちゃん」

田んぼを耕しながら、ユウが尋ねる。サナが首をかしげ、少し考える。

サナ「…なあんて。まさか、ね？」

ユウを見て、満面の笑顔の、サナ。

Fin.

とりあえずこんな感じ。

ちなみにこの『天×誅』、ゲーム化するなら絶対プレステね。ボタン配置の問題で。

つまり、△ボタンは握り飯を食うだけの「握り飯ボタン」、×ボタンはもちろん、最期の敵に天誅するだけの「天誅ボタン」にして、どっちも1エピソード中一回しか押さない贅沢仕様にした

。

さて、今回は自信持ってくださいないけど、どうかな？



「はみだしウマシカさん」

さて、今回から不定期で「はみだしウマシカさん」も始めてみよう。

そういえば、リケジョの件で書きたいことがあったんだ。あの記者会見を見たとき、俺ならこう書くて思ったことがあった。

「こんな記者会見はイヤだ！」

「これより記者会見を始めます。ご質問がある方は挙手を……」

「あ、ゲスニックマガジンの西条です。今、日本国中が最も知りたがってることで質問します。ズバリ、あの割烹着、あれ実はおばあちゃんのお古じゃなくて、百貨店で買ったって噂ですが。本当ですか？」

「いいえ。割烹着は…（タメ）…買ってません。おばあちゃんからもらいました」

「え、本当ですか～？ 実は、話題づくりのために百貨店で買ったんじゃないんですか～？ あ、じゃこの噂はどうですか？ 研究室でスッポンを買うなんて不衛生だって話があるのですが、あのスッポンも、実はつい最近購入したんじゃないんですか？」

「いいえ。ずっと前から飼っています」

「本当かな～？ 飼ってたとしても、誰か他の人に世話してもらってたとか、あ、逆にスッポンの世話が忙しくて、研究はそっちのけだったりとか？」

「いえ。スッポンの世話も研究も頑張りました」

「それでは次の……」

「あ、ゲスマガの西条です！ んじゃあの噂は？ あのピンクの壁紙も、つい最近替えたって、どうですか。これは本当でしょう？」

「いえ、あの壁紙もずっと前からです」

「本当かな～？ 壁紙なんて、何色でもいいんじゃないのかな～？」

「それでは次の方。あ、そちらの記者の方」

「はい。毎朝新聞ですが。すみません。今日本国民が最も知りたいことといえば、やはりあの細胞は本当にあるのか、という重要な科学的命題だと思……」

「ゲスマガの西条です！ おい毎朝、邪魔すんな、全然違うっての！ 今日本国民が一番知りたいのは、彼女があの割烹着でハダカ割烹着したのかって重要な命題だよ！ いわばチセイ的な？ 痴女の痴に、性欲の性で、痴性的に重要な命題？ ねえ、どこでね、いつどこでだれとなんの料理でハダカ割烹着したの？ それだけ教えて！ ね？……」（つまみ出される）

「あの記者こそ、現代日本でボーイズビーアンビシャスを体現した記者なのかもしれない」

「あ、西条です！（無理やり戻ってくる） ジャスケスケ割烹着の購入予定は？ 略してスケ烹着？」

こういう会見だったらよかったのになあ。

NHKの『LIFE!』にちゃんとリケジョ本人呼んで来て、本家にこれやってほしいなあ。

俺は特定の番組録画する以外、テレビはほとんど観ないし期待してないから、バラエティ番組がリケジョを差別的に扱おうが興味ないんだけど、単にその企画、本当に面白いの？ 笑えるの？ っては思う。

知的でなくても差別的であっても、差別されてる側もつい笑っちゃうような毒が一流だと思う。つまり、毒蝮三太夫みたいなね。「おいババア、まだ逝かねえのか。このくたばりぞこないが」って声かけてほしくて高齢者が中継に押しかけるって、とんでもない偉業だよ。そういうところを目指したい。

以上、「はみだしウマシカさん」でした。

考えるウマシカ～第十三回『天×誅 THE MOVIE ～今宵、お前にXを～』と「
よりぬきウマシカさん」～

<http://p.booklog.jp/book/85613>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85613>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85613>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ